

## 三郷地区の農業

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 芳川, 周子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/31224">http://hdl.handle.net/2297/31224</a>

## 5. 三郷地区の農業

芳川 周子

1. はじめに
2. 農業の概要
3. 区画整備事業
4. 溜め池・用水
5. 農業の今と昔
6. おわりに

### 1. はじめに

珠洲市の若山三郷地区というと、私にとっては縁もゆかりもない土地で、今回の調査実習がなければこの先も別段関わりを持つことはなかつただろうと思う。しかし、初めて行った三郷は、不思議と知らない土地のよそよそしさを感じず、すんなりと自分に馴染むような、むしろ自分から自然と親しんでしまうような気持ちになった。海と山に囲まれた豊かな自然と、飾らずに私たちに接して下さった住民の方々の雰囲気、私の妙な気構えを取り払ってくれたのではないと思う。

若山三郷地区には農家が多い。この度の調査を通して、三郷の人たちの生活は農業と非常に深く関わっていると感じ、三郷の農業の在り様に強い興味を抱いた。ここでは、三郷の農業の事情について明らかにし、人々の生活に触れてみたいと思う。

### 2. 農業の概要

ここでは珠洲市の農業の概要について述べる。出典は『珠洲市史 第六巻』である。

珠洲市域の水田のほとんどは内浦側に分布し、とくに若山川、鶉飼川、紀の川流域に多くみられる。珠洲市の総人口の約67%が農家人口、全世帯数の約60.8%が農業世帯であった（昭和50＝

1975年)。そのうち兼業率が96%以上で、更に兼業農家の91.6%が農業収入よりも農外収入の方が多い第二種兼業農家。耕地面積は水田が71%以上も占めていた。

専兼業別農家の状況は、兼業種をみると兼業農家のうち84.7%が恒常的勤務・出稼ぎ・日雇臨時工などの雇われ兼業であった。

戦後、珠洲市で行われた大きな耕地事業に、若山町上山の若山ダム建設工事がある。

昭和50(1974)年時点で農協は宝立町・若山町・正院町・三崎町・珠洲市農協の5つであり、昭和53(1977)年4月には5農協が合併し、珠洲市農協となった。

## 2.1 三郷地区の農業

ここでは、農業センサス(1960年～2005年)のデータを基に、三郷地区(出田、広栗、鈴内)の農業の概要を述べる。

出田・鈴内・広栗の3区の農業は米作・畑作が主で、その他に樹園地が存在する。畑作には大豆・紫蘇の栽培などがあり、自家消費が目的の場合は多種類を少しずつ育てているところもある。樹園地はリンゴの果樹園などがある。1960年の時点では米作の耕地面積が全体の大半を占めていたが、1985年までに畑作の耕地面積が急激に拡大し、米作の約半分程度の面積を持つようになった(表2)。

表1 農家数(三郷地区合計)

年	世帯数(戸)	総農家数	専兼業別農家数		
			専業農家	第一種兼業農家	第二種兼業農家
1960		220	16	118	86
1970		204	12	74	118
1975		164		16	143
1980		179		11	160
1985		181	16	12	153
1990		173	17	14	142
1990(販売)		147	15	14	118
1995		154	18	11	125
1995(販売)		133	14	10	109
2000		115	-	-	-
2000(販売)		95	13	5	77
2005(販売)		78	16	8	54

(出所：農業センサス)

表2 経営耕地面積（三郷地区合計）

	面積計 (a)	田の面積	畑の面積
1960			
1970	13310	11960	1350
1975	8979	7508	1471
1980	15322	11242	4080
1985	16746	11468	5278
1990	15721	10717	5004
1990 (販売)	15195	10231	4964
1995	14938	10315	4623
1995 (販売)	14572	9984	4588
2000	12066	7992	4074
2000 (販売)	11740	7703	4037
2005 (販売)	11211	7234	3977

(出所：農業センサス)

表3 経営耕地面積規模別農家数（三郷地区合計）

	自給的農家	0.3ha未 満	0.3~0.5	0.5~1.0	1.0~2.0	2.0~3.0	3.0~5.0	5.0~10.0	10.0ha以 上
1960									
1970		21	42	119	21	1	-		
1975		56	20	70	14	4	-		
1980		21	38	95	19	3	3		
1985		26	32	91	27	1	-	4	
1990	26								
1990 (販売)		*	42	80	19	2	1	3	
1995	21								
1995 (販売)		*	40	61	23	5	-	4	
2000	20								
2000 (販売)		*7	41	26	13	2	2	4	
2005 (販売)			19	30	17	6	3	-	3

(出所：農業センサス)

表4 農業就業人口（三郷地区合計）（単位：人）

	合計	15~29歳	30~39歳	40~59歳	60~64歳	65歳以上
1960						
1970	339	38	54	145	36	57
1975	162	33	14	49	18	47
1980	192	18	10	68	24	77
1985	192	8	8	45	36	96
1990	182	12	6	36	30	100
1990 (販売)	167	11	6	36	26	90
1995	137	5	2	22	19	89
1995 (販売)	129	5	2	21	18	83
2000						
2000 (販売)	102	5	-	16	19	63
2005 (販売)	110	4	3	14	15	73

(出所：農業センサス)

全体的に総農家数・農業就業人口は減少傾向である。専兼業別に見ると、専業農家数にはあまり変化がないが、第一種兼業農家数（農業所得を主とする兼業農家数）・第二種兼業農家数（農業所得を従とする兼業農家数）は、1960年までは第一種が大半を占めていたのが、1960年から1975年の間に逆転し、第二種が圧倒的に多くなった（表1-1）。同じ時期に総農家数・農業就業人口も大きく減っており、それ以降減少が続き2005年にはともに1960年時の3分の1程度にまで落ち込んだ。農業就業人口については、特に15～39歳の就業者が非常に少なくなっており、1980年以降は65歳以上の就業者が最多数という状況が続いている（表1-4）。背景には日本の高度経済成長による脱第一次産業の風潮や、人口減少、高齢化、勤めに出ることによる農業離れなどがあった。

また、現代に近づくにつれ農家あたりの経営耕地規模が大きくなっていく傾向がある（表1-3）。これは非農に切り替えた家の農地を残った農家が引き受けているためであり、そのため農家数の減少の割合に対して耕地面積は緩やかな縮小に留まっている。

## 2.2 各区の農業の違い

ここでは出田・鈴内・広栗の3区の農業を比較してみる。

総農家数・農業就業人口を見てみると、ともに1960年～1990年までは出田、鈴内、広栗の順に多く、1990年を境に鈴内が出田を超え、1990年～2005年は鈴内、出田、広栗の順に多くなっている。出田と鈴内の差は微妙なものであるが、広栗の総農家数・農業就業人口は出田・鈴内の2分の1程度であり、他の2区を大きく下回っている。住民の方（男性、80代）からうかがったお話によると、広栗は風あたりにムラがあるため、その影響で稲作にはあまり向いていないらしい。

経営耕地面積の面では、鈴内の畑面積の小ささが目立つ。1970年頃までは3区の畑面積に大きな差はなかったが、その後出田・広栗が急激に面積を拡大していったのに対し、鈴内はあまり大きな変化は見られない。出田では2000年～2005年で畑面積が田面積を上回り、広栗では1980年～2005年で田面積の半分程度の畑面積が保たれている。

## 3. 区画整備事業

ここでは住民の方々のお話をもとに、三郷地区で過去行われた区画整備事業について述べる。

区画整備事業とは、土地改良事業の一環として行われる灌漑整備、圃場整備等の事業を指し、区画整理、基盤整備等とも呼ばれる。主に国、都道府県または市町村や農業協同組合等が主体となって行うもので、住民の方々から聞いたところによると、出田では昭和30（1954）年頃と平成4（1992）年頃の2回、鈴内・広栗では昭和45（1970）年頃の同時期に行われた。

昭和30（1954）年頃に出田で行われた区画整備は、1～3年間の冬季に田を部分毎に分け順番に行われた。国による事業であったため費用のほとんどが国の公費で賄われ、地元の負担は2～3割程度だった。地元の農業従事者は、整備によって農業ができない間、整備の土役に従事して稼いでいたため、整備のため地元が負担したお金が土役報酬として返ってくるというようにお金が回っていた。土役はほとんどが地元の農家の人たちだったため、近所の農家で協力して区画整備したと言っている。しかし、農業をしない間は自分たちの食べ物も収穫できないため、来年の分の米を今年に回したり、近所の農家と協力したりと工夫していた。

平成4（1992）年頃の区画整備はすべて機械で行われ、土役はなく、地元の人は整備の監督をしていた。そのため、昔と比べるとまとまりがなかったようである。また、この頃には農家の高齢化や収入の問題が生じていて、区画整備で農作業の効率が良くなり委託しやすくなったため、この区画整備を機に農業をやめる家が多かった。

昭和45（1970）年頃、同時期に鈴内と広栗で区画整備が行われた。この整備で点在していた田がまとめられ、狭い田で細々と農業をしていた人は、これを機に自分の田を請け負いに出すようになった。段地の田には国から補助金が出され、高い位置の土を土地の低い部分に盛って地面をならしたが、削った土を盛った部分はよく作物が育つ反面、削られた部分は今日でも目に見えてわかるくらい赤く、地力がない（赤土で作物が育たない）。鈴内・広栗では一度しか区画整備が行われていないが、現在のように、高齢化などの問題で農業の先行きの目途が立たない状態では、なかなか区画整備はできない。

#### 4. 溜め池・用水

ここでは農業に欠かせない水を引く溜め池と用水について述べる。

三郷地区周辺には5つの溜め池があり、古くから住民の管理の下、農業用水として水が引かれていた。鈴内、広栗においては、現在でも溜め池から水を引くのが主流で、その他に川の水も使われている。それらは水を使用する農家が池毎に順番に管理している。管理費用も区民から分担徴収され、溜め池の管理に年13万円、川の管理に年2万円と決められている。持田が多いほど額は多くなる。

しかし、出田においては金付瓦用水という用水トンネルが主に使用されている。以前は出田も溜め池を使用していたが、昭和30（1954）年に行われた区画整備事業の直後に金付瓦用水が掘られ、それ以来金付瓦用水が農業の主用水となった。管理組織として、出田の田の所有者から成る金付瓦用水管理組合がある。用水が通った後は溜め池は補助という扱いになった。

## 5. 農業の今と昔

ここでは実際に地元で農業に携わっている方々から聞いたお話をもとに、昔からの三郷地区の農業の様子について述べる。

### 5.1 昔の農業

#### 広栗の A さん (男性、80 代)

ひと昔前は兼業農家が多くあって、作業をするのも近所で協力して行う風土があった。昔は近所の家へ仕事の手伝いに行くのは奥さんの仕事だったそうで、近所の家同士で互いの田んぼへ良く手伝いに行っていたらしい。特に、地主の持つような大きな田んぼの場合は、謝礼金を手伝いに来た人に対して盆や年の暮れにまとめて払うこともあった。

#### 広栗の B さん (男性、60 代)

B さんが中学生くらいのころは、田植えを行うのに馬を使っていて、ほとんどの家が馬で作業をしており、馬小屋もあった。馬をもっていない百姓は、馬の持ち主に頼み、作業はその馬の持ち主が行ったという。

#### 出田の C さん (男性、90 代)

戦時中は米の他に芋も作ったが、どちらも役人に持って行かれ、発酵させて燃料として使われたらしい。また、石膏山で働きながら農業を行っていたようである。C さんが若いころは、戦前と戦後 20 年間は石膏山で働きながら田んぼをやり、朝起き田を耕し、7 時にご飯を食べて自転車で石膏山へ働きに行き、4 時に帰ってきてまた田を耕す、という生活サイクルだった。このころは他の家の田も作っていたそうだ。そして、その後 C さんは 50 歳で石膏山を辞め出稼ぎを始め、これを機に他の家の田んぼもやめて耕す面積は 2 分の 1 の 4 反 (30 a) になった。70 代のころに機会があり、田んぼをすべて請け負いに出し、畑に専念するようになった。畑では家族や親戚に送る分だけ作っており、グリーンセンターなどには出していない。

### 5.2 農業について

農業について、広栗の D さん (男性、70 代) にお話をうかがった。

農業がなかった時代、稲作においては泥負い虫という大きなシラミくらいの泥を背負っている虫に悩まされていた。この虫は稲の葉を食べ、それによって稲が白くなってしまい、田が全滅してしまうこともあった。他にもウンカという虫が毎年出てきたが、泥負い虫と比べれば被害は小

さかった。現代ではカメムシなどがいるが、昔はいなかった。また、いもち病という稲の病気もあり、これは肥料のやりすぎが原因であった。

初めて出回りだしたころの農薬は、効き目が強力すぎ、自然に生息していたドジョウやバッタ、イナゴ、タニシなどがいなくなる事態を引き起こした。徐々に農薬は弱いものになっていったものの、今でもいなくなった生き物は戻らない。以前は用水路などにいたタニシなどは、サザエのように炊いて味噌汁に入れて食べていたらしい。

### 5.3 今の農業

全体の農家数は減少していつている。働き手の高齢化、米の値下がりなどの理由から農業を止め、田を手放す家が多い。非農に切り替えた家の田んぼを引き取り農地が大きくなった、という農家もあったが、逆に昔より田んぼが減ったという家もあった。出田の田の面積の変化を見ると、以前は50町歩あった田が、今は35町歩に減り、減った分の土地は団地や宅地となったらしい。鈴内・広栗は現在どちらも28町部ほどの田の面積がある。

区民のほとんどは田を所有しているが、持っている田んぼを他所に依頼して作業してもらっているという家も多く、依頼は個人に頼む場合もあるが、出田では主な依頼先として「農業法人末広」がある。もちろん依頼せず自分で米を作っているという農家もあり、米の個人販売を行うなど販売方法を工夫したり、JAで提示されるような生産量には届かないため家で食べる分のみ作っているという農家もあった。

稲作の依頼を引き受けているという鈴内のEさん（男性、40代）は、Eさん自身の持田は7反ほどだが、現在は4町部ほど依頼された分も含め耕作している。Eさんは普段ライスセンターに勤務しながら米作りをしており、その他にもカボチャ、梅、紫蘇なども作りJAなどを通して販売しているらしい。

### 5.4 農家民宿

農家の新しい経営スタイルとして、農家民宿を営む鈴内のFさん（女性、60代）にお話をうかがった。

Eさんは3年前から農家民宿を始め、稲作を中心とした農業体験をすることができる。客は民宿に泊まるだけの人もいれば、親子連れで訪れ子供に農業体験をさせる人もいる。毎月平均して同程度の人数が訪れ、珠洲でトライアスロン大会が行われる8月末には、30人くらいの人が宿泊する。リピーターが多く、クチコミで広まっているらしい。

Eさんが農家民宿を始めた理由は、農家民宿を推す市の働きと、東京から来た2人の大学生が、農業体験の際に非常に感動してくれたことをきっかけに農家民宿を営む決意をしたことだった。

民宿となっている築300年ほどのかやぶき屋根の宿は「くず屋」とも呼ばれ、「すすき」を使っており、情緒溢れる様子である。

## 5.5 農業法人末広

末広は出田・広栗・経念の地区の田をまとめている会社である。三郷地区でも末広に田を依頼している人は多い。

末広設立の経緯は、まず平成4(1992)年から区画整備が始まり、同年2月に末広の前身となる「若山第一機械利用組合」が設立された。しかし、この組合では米を売ることが出来なかったため、平成7(1995)年2月に「有限会社末広」が設立された。末広の設立にあたっては、周囲の農家との間に議論があったが、当時、ちょうど新しくできた「農業人材育成機構」(財団法人)など、県、市から後押しを受け、石川県、珠洲市、農協が説明会を開くなどして末広について農家から同意の判をとって回ったことにより、無事認められた。平成8(1996)年地元農家の3分の2以上の合意を得て12月、特定農業法人に認定された。

末広の創立から深く関わっているGさん(男性、60代)がおっしゃるには、「大規模に農業をやっていくところは残っていくが、それでは農村は誰が守っていくのか、という問題になる。稲作を大規模にやればやるほど農村が壊れていく。百姓は儲け(経済)だけではやっていけない。やはり根本は「荒れた田んぼをつくらない」という思いがあるが、「大型にするとこれを意識して出来なくなるかもしれない。それを恐れている。」ということである。

## 6. おわりに

初めて珠洲市若山三郷地区に行き、その自然の豊かさや新鮮な食材を使ったおいしいご飯に感動してただけに、調査を通して知った農村の厳しい現状は、私にとって衝撃的なものだった。働き手の高齢化や若者離れ、農作物の値下がりなど、農家の直面している問題は多い。経済的に考えれば、農業も大規模に大量生産志向で行った方が、確かに効率的で利益も大きいのだろうが、末広の方がおっしゃった通り、それでは農村が壊れてしまうだろう。

私が今回の調査で強く印象に残っているのは、若松に住んでいる人々である。若松で出会った人々の多くは、私の親よりも年上であろうと思われる人たちだったが、どの人も元気で気持ちのいい人たちだった。なぜこんなにも元気なのかと考えると、私は農村の生活のおかげではないかと思う。農村にはお金とは違う豊かさがある。これこそが、都会で粉骨砕身働いてお金を稼いでいる人たちが求めているものなのではないだろうか。

最後に、この度の調査実習は、私にとって非常に考えさせられるものでありました。こうして若松を知る機会を得ることができ、本当に良かったと思います。調査にご協力して下さった方々、若松で出会ったすべての方々にお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。